

沼津の暮らしラボ

第一回「住×福祉」

日 時：令和3年3月18日 17:30 - 19:30

場 所：沼津ラクーン6階

メンバー：

座 長：青木純（沼津市リノベーションまちづくりアドバイザー、(株)まめくらし 代表取締役）

学 識：出村嘉史（岐阜大学工学部社会基盤工学科 都市・景観研究室 准教授）

専門家：加藤寛之（都市計画家、(株)サルトコラボレイティヴ 代表取締役）

ゲスト：首藤義敬（株式会社 Happy 代表取締役）

パネリスト：今井風多（(株)奥駿河家守舎 代表取締役）、大木真実（NUMAZU DESIGN CENTER 主催）、小松浩二（REFS 代表）、杉浦希未子（(株)tasuki 代表取締役）、杉澤教人（(株)大志建設 代表取締役）、鈴木智博（(同) REIVER 代表社員）、山田知弘（(有)日の出企画 代表）

オブザーバー：会場に来てくださった方々

1. 挨拶（沼津市まちづくり政策課 小野課長補佐）

2. 「沼津市の現状について」（沼津市まちづくり政策課 渡邊主査）

（※別添資料参照）

3. 講演「多様な暮らしの創造『住×福祉』」（首藤義敬氏）

○座長青木氏からの挨拶

- ・福祉の本来の意味は「幸せ」「豊かさ」。
- ・5年間で約50の事業が動いて約4,000人が関わっている沼津のリノベーションまちづくりが、成長していくために福祉の視点が必要と思い、沼津市と共に企画した。自分の事業や身近な人たちにこんなことが役立つのではないか、こんなことがやりたくなったという話を、後のフリーディスカッションで話せればと思う。

○ゲスト首藤氏による講演「豊かな暮らしの創造『住×福祉』」

- ・シンプルに、楽しみながらやる福祉
- ・いろいろな人にどんな暮らしがしたいのかをヒアリングし、提案する仕事
- ・違う考え方を認めながら共存するのがダイバーシティの本質

- ・幸福度はUカーブを描く（壮年期は幸福度が低い）
- ・カオスクリエイター…いろいろな世代を狙ってカオスをつくる
- ・「エゴを社会化する」
- ・「赤ちゃんとおじいちゃんおばあちゃんは似ている」というリアルを抽象化し実践、探求があふれる日常。
- ・今の自分があるのは、いろいろな人に会えたから。
- ・多世代型介護付きシェアハウス
- ・自身の経験（ダブルケア）から得たもの
- ・育児、介護などのためには何かをあきらめるのが通常（自己犠牲）→何もあきらめずにやりたいようにやる（エゴ）→エゴの社会化
- ・はっぴーの家…日常の登場人物を増やすことで人に会うことによる学びを得る
- ・Happy の理念…ハッピーな暮らしを問い続ける、瞬間の幸せを追求
 - アタリマエをリノベーション ex 大家族
 - 非常識を新し価値観にする、ハッピーの総量を増やす、ほどよい関係性をデザインする
- ・阪神淡路大震災後に思ったこと…再開発でまちはキレイになったけど幸せになっていない、人のつながりが失われた
- ・人を巻き込むこと（一人のプロより 100 人の素人）。会社の事業計画もみんなで作っている。
 - ・競争ではなく共創
 - ・カオス、イノベーション…当初狙っていなかった効果が得られる
 - ・トラブルと向き合うことで新しい価値が生まれる
 - ・やり口を抽象化する
 - ・一人を狙わない（一人の問題にしない）。登場人物を増やして全体の幸せを狙う。
 - ・ベストを求めなくていい。ほどよい関係性をデザインする。
 - ・日本の福祉は悪いところを治そうとしたがる。問題に向き合わず、場の温度を下げることによる解決の方法。違和感は 3 つ以上重なるとどうでもよくなる
 - ・共感を押し付けるとダイバーシティからは遠ざかる
 - ・どう生きたいか⇔どう死にたいか
 - ・事業をするというよりアートを作るような感覚でやっている
 - ・トラブルは大喜利のネタ

4・フリーディスカッション

○座長青木氏

- ・話を聞いて福祉が何か伝わってきたと思う。多世代マイノリティを巻き込むと もっと面白くなるという言葉が印象に残った。役に立とう、助けようというよりは、

お互いが面白くなるということが一番最初にあるから、誰も消耗していない。それぞれのハッピーが結びついている。福祉の現場だけでなく、あらゆる場に当てはまる話であったと思う。

・沼津ならではの、沼津に住んでいる人達が幸せに感じることを増やすことが、このラボの役割です。それは強要するものでも、共感するものでもなく、それぞれの幸せの感じるポイントがたくさんあったほうが、引っかかるポイントもたくさんあると思う。いろいろな幸せや選択肢が増えれば、自分の幸せを発言したい人もきっと増えるはず。首藤さんの講演にそれが詰まっていたのだと思う。

○パネリスト杉浦氏

・なんでもやっていいんだな、と思えた。女性の就労サロンをやっているが、利用者には就労を望まない人もたくさんいて、本当に人それぞれ。その人らしさを受け入れることが大事だと分かった。沼津のママが、そういう風になったらいいと思った。

→ゲスト首藤氏

・日本は、こうしなければならないという、見えない大きなものがあり、例えば実際に働きたくない人でも、働かななければならないという状況にある。こうしなければならないということが、もったいない。これだけ恵まれているのは世界を見ても稀であり、何でもそろっているのに、みんなが文句を言いすぎている。モノにあふれている日本で、何に満たされていないのか。それは、社会の選択肢の少なさが原因である。

○パネリスト鈴木氏

・介護保険制度とどう折り合いをつけているのか気になった。
・戸田でゲストハウスをやっているが、そこに集まる人は、結構疲れている人が多い。なんか頑張んなきゃいけないプレッシャーを感じている人が、このまちに来ると、そういうのがどうでもよくなっている様を見ることができる。

→ゲスト首藤氏

・国の評価の尺度の狭さ。要介護度に応じた報酬体系であることが問題。
・はっぴーの家には誰でも入れるが、不特定多数ではなく、特定多数である。HP や看板はないから、はっぴーの家に来ている人は少なくとも知り合いの紹介で来ていると認識している。性善説に基づく特定多数をつくることをしている。

→座長青木氏

・誰でも来れるところで公園のような場所。屋根のある公園みたいな。
・自分の居場所は奪われたくないというのは本質的だからこそ、利用者がしっ

かりと紹介する。

○パネリスト今井氏

・自分の出身校は、上下関係もなくテストも校則もない。はっぴーの家は似ていると思った。授業にも出ていなかったが、学校には行っていた。それは、居場所があったから。認めてくれる人がいることが、居心地がよかったのだと思う。いつもそういう場所をつくりたいと思っている。東日本大震災以降に沼津に移住して、今では友達も増えた。ゲストハウスを経営しているが、そういう居場所づくりをしているのだと改めて思った。

・内浦地区に住んでいるが、内浦の高齢者は元気だと思う。まちなかと田舎の高齢者は違いがあると思う。

→座長青木氏

・好きにならなくていい、見方が変われば接し方が変わる。そこで問題解決をしない。という考え方が伝わったと思う。

○パネリスト山田氏

・おばあちゃんのヘッドホン姿が印象的。それをヘンだと思うのは自分がフィルターをかけて見るからだと思った。いろんなものを素直に捉えれば、いろんな考え方が変わると思った。

○学識出村氏

・いろいろな人がつながればいいというのは感覚的にはわかっている。そういう場面を、リアリティを持って見ることはなかなかできない。やるためには、それぞれみんな自分の殻を開けなければならないし、それが一番難しい。それを何かしらできているのがすごい。

・周りから環境つくって「いいんだよ(許容する)」と認める空間をつくるのは、すごいヒントである。あの場だけでなく、まちでも全部同じことが言える。見方を変えろという発想は、常に重要と再確認できた。

・多様なネットワークがつながるときに物事が動き始める。あの場でそれが出来ているのは、多層なヒトが受け入れられる素地が重要。

○パネリスト大木氏

・大きな家族というのが商店街につながると思った。商店街は若い人から高齢者がやっている店まである。多世代が行き交う空間。

・新仲見世商店街では、アーケード撤去などを行っていて、公園みたいな商店街を目指している。多世代が行き交い滞在し、なんでも受け入れるというのは、商店街

の今後のいい空間を作っていくヒントになる。

→座長青木氏

- ・登場人物を増やすというところがポイントで、商店街は同じ立場の人が集まっているので問題も起きやすいし問題の解消もしづらい。ただ、大木さんの子供が商店街とつながりを持つことで新たな変化が生まれた。登場人物を増やすことが商店街の姿をつくっていけることだと思う。
- ・商店街の中は風通しもいいし、はっぴーの家の出来事を商店街にそのまま持ち込んでもいいと思う。商店街で宿題をやっている子供たちがいてもいいし、おばあちゃんたちのケアをしている姿もあっていいと思う。

○パネリスト杉澤氏

・程良い関係性をデザインするという言葉が印象であるが、程良い関係性は難しいと思う。正直、人間関係の面倒くささをどうしているのか。

→ゲスト首藤氏

- ・対人関係の場合は、ベストを狙わずベターを落としどころにしている。
- ・自身の経験から、弱さやマイナスポイントを可能性と考えるようになり、誰かの弱さは誰かの可能性を広げる。
- ・資本主義社会は優秀な人が社会をつくってきているが、今は限界を迎えている。ということは、まちにあるマイノリティや弱さが一緒にいられる状況をつくるのが、新しい価値を生みやすい。マイノリティのほうが今は可能性を持っている。

○パネリスト小松氏

・リスクに対する行動の起こし方が、常識というフィルターがなくクリエイティブだと感じた。

・沼津市では駅周辺の再編を考えていて、もっときれいな街を目指している中、暮らしということがしっかりとしないとまちが単なるきれいな街になるだけで終わってしまう。一人の事業者だけでなく、面白い人たちが役割を持ってまちの課題を解決していくことが必要と思った。

→座長青木氏

- ・定期マーケット「週末の沼津」はこの活動の変化、多様化が今の沼津の可能性となっている気がしている。以前までは、小松さんができることを小松さんが頑張ってやっていた。最近は、たくさんの人たちにいろんな役割を担って、巻き込んでやってきた結果、今までまちなかでは場合によってはお荷物と思われてしまっていた人たちが、そこで活動することによってまちの一員と認められるきっかけになってきた。

・つながり、関係性が生まれると居場所のあり方も変わっていく。それぞれの居場所をしっかりと作り続けることがまちの多様性だし、まちの立体感、面白さだと思う。まちづくりからまちの関係づくりへ。沼津のリノベーションまちづくりは100%U-TURN CITYを目指していて、沼津から巣立っていった人たちが、沼津を意識するというのが、沼津のリノベーションまちづくりのスタートだった。わざわざ伝えなくてもやっていることの延長上にフックがあった。面白い人と面白い場所、そこに関係性があるから魅力を感じる。

○学識出村氏

・資本主義は、個人の豊かさをひたすら追求することが善とされているので限界がきた。そうではなくて、これからは互いにつながっている社会の在り方を描かないといけない。それぞれの楽しみをそれぞれが追えばいいし、それぞれの幸せを追求すればよいのだけど、それでも互いになんとか横目でバランスをとっているはっぴーの姿が素晴らしいと思った。それはみんなが認め合っていないとできないこと。今までの関係の在り方ではなくて、新しい関係の在り方の中でそれぞれが自分の価値観で探求する多様性を持つことが理想だけど、今後まちとして統一感、みんなで歩調を合わせる目的が必要だとしたら、それはこういう状況を受け止める「姿勢」ではないか。

→ゲスト首藤氏

・「共感」は時として危ない言葉だと思っている。みんなが共感したらそこにイノベーションは起こらない。目的や在り方を共通認識することで、多様性がある。

○専門家加藤氏

・目の前の自分のやりたいことをこなしていくと、周りの人の問題解決になっている。しかし、あそこまでリスクをクリエイティブに解決しようとする度胸はどこからくるのか。リスクを解決することで幅を広げていくことがすごい。

→ゲスト首藤氏

・高いリターンには高いリスクがついているが、それをヘッジできるかを考えて動くことが重要。

○オブザーバー富永氏

・介護の現場にいる人や当事者が来ていて首藤さんと話をしたがっている。パネリストは不要ではないか。

・首藤さんがやっているやり方だと行きやすいのかなと思う。デイサービスに行かせてもどんどん悪くなってしまうと思う。男性はコミュニケーションが上手ではな

いから入りづらい。

→ゲスト首藤氏

・例えばデイサービスもそうであるが、日本のすべてのビジネスにも言えることだが、一つのビジネスだけでマネタイズしようとするは大変である。介護であればデイサービス。はっぴーの家を例にすると、デイサービスを取ろうと思うと取れるが、敢えて取っていない。共有リビングでデイサービスを登録したほうが、短期的には介護保険の報酬は上がる。しかし、それを取らないほうが得るものが多いと考えた。シェアハウス×食事提供×不動産×学習×医療×介護×そこに住んでいる人に何が必要なのかをヒアリングして掛け合わせている。一つだけやろうとするは大変である。目の前のお客さんが何をしてもらいたいかをクリエイティブに考えながらするべき。今やっている事業にしがみつくだけではなく、今、目の前にいるお客さんに何ができるかというのを、一つでは難しく、三つくらい掛け算すると新しいビジネスが生まれやすいのではないかと思う。全体で利益を出すという発想に切り替えるとやりやすいのかな、といろいろな業界を見ていると思う。

○オブザーバー伊藤氏

・自分はスケーターだが、「沼津、スケーター、掲示板」とネットで検索すると「銃殺してしまえ」と出てくるほど、沼津のスケーターは嫌われている。しかし、ローカルやつながりを大事にしている、中央公園でゴミ拾いなんかもしている。スケーターというリスクを踏まえて、まちをリノベーションしていくなら、どのようにそのリスクを回避しリターンまでもっていくのか？

→ゲスト首藤氏

・スケーターというところだけで考えてはだめ。google マップで日本全国を見ても同じ街ばかりである。そもそも、過去の歴史から見ても文化のないまちはなくなっている。いくら整備してきれいな街や安全安心なまちをつくったとしても、人間が選ぶのはカルチャーがあるまち。衣食住だけがあって人間は満足するかというと絶対にそうではない。スケーターを守るという視点ではなく、カルチャーは育てなければならない。海外の公園はすごく機能している。スケーターだけじゃなくて、外でやるアクティビティがやりやすいという雰囲気をつくれば、ほかのものがいいのに何でスケーターだけだめなのかという議論になる。文化がないまちは歴史を遡っても崩れる。なので、文化は守るべきものである。

○オブザーバー山崎氏

・大岡団地で、住んでいる人たちが笑顔で住み続けられる活動をやっている。関係

人口を増やすことが見えていなくて、何をつくったら喜ぶのかなということしか見えていなかった。今後の考え方が変わるきっかけになれた。

○パネリスト鈴木氏

・覚悟の部分について、いろんな決定について覚悟がいると思うけど、どのように組織で決めているのか

→ゲスト首藤氏

・発起人は必要であり、TEDにある裸踊りの動画のように、ムーブメントの起こし方のやり方をやっている。今の沼津の空気が好きである。東京で同じようにトークライブやっても、このように意見が出てこない。出てくるといことは、それだけ地域のことを考えていること。目の前のニーズにこたえるのは、相手の満足度はゼロ。相手が言っていることに答えがなく、その人が今はまだ見えていないことに応えることが一番大事。